

文法研究

筑波大学文芸・言語学系教授 北原保雄

日本語は、文法によって組み立てられているのでしょうか。「いるのでしょうか」というように無責任な言い方をするのは、「日本語を組み立てている文法はこれです。」と取り出して示すことができないからです。日本語の文法はいろいろと明らかになっているのではないかと思われるかもしれませんが、それは、ある人（研究者）が、ある立場から、まとめた文法であって、日本語の文法の一つではありますが、それが、日本語の文法ではないのです。つまり、いろいろな人が調べたり、考えたりした、いろいろな文法があるということです。これは、日本語の場合に限ったことではありません。どの国の言語についても同じことです。几帳面な人は、いやなことだ、困ったことだ、と思うかもしれませんが、逆に、それならば、自分も、自分の立場で、文法を研究してみようという意欲が湧いてくる人も多いのではないのでしょうか。

I. 何を研究するか

日本語の文法を研究するといっても、言語は複雑な存在ですから、どこから手をつけたらよいものか見当が付きません。そこで、いろいろに分けて、研究の対象をします。分け方にはいろいろな方法がありますが、文法の研究ということからは、

文章—文—文の成分—単語—形態素

という単位に分けるのが普通です。

文章は、多くの場合、二つ以上の文から構成されています。文がどのようにして文章を構成するのか、文章とはどのようなものであり、文章にはどのような種類があるか、などということは興味深い問題ですが、これは**文章論**で扱うこととして、文法研究の対象とはしないのが一般です。文法研究では、文以下の単位を研究対象として、①文はどのようなものであるか。文にはどんな種類があるか。②文はどのようにして構成されるか。③文の成分はどのようなものであるか。文の成分にはどんな種類があるか。④文の成分はどのようにして構成されるか。⑤単語はどのようなものであるか。単語にはどんな種類があるか。⑥単語はどのようにして構成されるか。⑦形態素

はどのようなものであるか。どのようにして単語を構成するか。などが、主として研究課題となります。

たとえば、

(1)バラの花が 赤く 咲いた。

は、一つの文ですが、

(2)バラの花が 赤く 咲いた 庭に・・・

のように続いていけば、文の一部であって、文とはいえません。句点が打たれて終止すれば、文となるわけですが、その句点が打たれるということは、どういうことなのでしょう。これが、文とはどういうものであるかということを考えることです。

文の種類は、文末の表現によって変わります。「・・・咲いた。」は平叙文、「・・・咲いたか。」は疑問文、「咲いた！」は感嘆文、「咲け！」は命令文といった具合です。ですから、文末についての研究は、文法研究の重要な位置を占めます。

日本語の文は、単語から直接構成されると考えるよりも、単語は文の成分を構成し、文の成分が文を構成すると思った方がよいように思います。

文 ⇄ 文の成分 ⇄ 単語

(1)の文では、「バラの花が」「赤く」「咲いた」の三つが文の成分であり、これらの**文の成分**が、(1)の文を構成していると見るわけです。「バラの花が」は、「何かが咲いた」の「何かが」を補っているものです。「咲いた」だけでは何が咲いたのか分からない。その「何が」を示しているのが「バラの花が」です。「バラの花が」は「咲いた」に要求されている文の成分であると言うこともできます。(1)の文では、「バラの花に」とか「バラの花を」とかは言えません。それは、「～に」や「～を」は、「咲いた」から要求される文の成分ではないからです。「バラの花は」「バラの花も」「バラの花さえ」などは言えます。それはどうしてでしょう。それぞれ、「バラの花が」とはどう違うのでしょうか。

(1)の文の「赤く」は、「どのように咲いた」かの、「どのように」を詳しく表現している文の成分です。「赤く」は色について詳しく表現したのですが、形、大きさ、

早さなどについても、「丸く」「大きく」「ぱっと」など、いろいろに詳しくすることができます。

(1)の文は、「バラの花が」によって意味が補われたり、「赤く」によって意味が詳しくされたりして、意味が完全に詳しいものになっているのですが、文の中心になっているのは、「咲いた」という成分です。「バラの花が咲いた」と「赤く咲いた」とが一つになったものが(1)の文です。「咲いた」で終止すれば文になりますが、「咲いた庭に」「咲いたが」「咲いたら」などととなると、次へどのように続くかが問題になってきます。

II. どのように研究するか

(1)の文を例に、文法上どういうところが問題になるか、その一部を見てきましたが、(1)の文は、

(3)	バラの花	{(a)が (b)は (c)も (d)さえ	{(a)赤く (b)丸く (c)大きく (d)ぱっと	咲	{(a)いた (b)いている (c)いていた (d)く
-----	------	--------------------------------	-------------------------------------	---	--------------------------------------

の中から、一番上の(a)を選択してできているものであるということです。(a)~(d)はほんの一例で、これ以外にも多くのメンバーがあることは言うまでもありません。

(1)の文の「バラの花が」は「は」を選択していたら、違った文の成分になっています。主格と主題の問題は、日本語の文法の重要な課題の一つです。

「赤く」は連用修飾の成分ですが、この成分についてはさまざまな研究が行われており、いろいろな種類の成分があることが明らかになっています。

(4)鉄が どろどろと 流れる。

(5)鉄が どろどろに 溶ける。

(4)の「どろどろと」は、鉄の流れる様子を表しています。それに対して、(5)の「どろどろに」は鉄が溶けた結果の状態を表しています。連用だけでなく、連体修飾につい

ても、修飾成分と被修飾名詞との意味関係に興味深い問題があり、研究が進められています。

(1)の文において、「バラの花が」や「赤く」を「咲いた」が受けるのは、「咲く」という動詞の力によるのです。「咲く」は自動詞ですから、「～を」を受けませんが、「読む」という他動詞は「～を」受けることができます。また、「教える」や「紹介する」などのように、「～に」「～を」を受けることのできる動詞もあります。また、使役の「せる」「させる」や受身の「れる」「られる」を付けることによって、「～に」や「～を」を受けることができるようになります。(例「歩かせる」「読ませる」「笑われる」) 動詞の格支配の問題は、文の構成を考える上で重要な課題です。

「咲く」「咲いた」「咲いている」「咲いていた」などの違いは、テンス・アスペクトの問題です。基本的には、「ル/タ」はテンスの対立、「ル/テイル」はアスペクトの対立ということになりますが、事実はそれほど単純ではなく、「タ」は、アスペクト・テンス・モダリティの三つにまたがるとする意見もあります。

そのモダリティですが、これは古くから「陳述」と呼ばれて議論されてきたものです。最近ではモダリティと呼ばれることが多く、対象とされる範囲も拡大していますが、分からないことも多く残されています。

以上、簡単な紹介ですが、要するに、研究課題はいくらでもあり、研究方法もいくらでもあるということです。大切なのは、日本語の表現に、なぜ、どうして、という疑問を抱き、それについて深く考えるということです。その際、広く類例を集めて考え、先行研究によく学ばないと、独りよがり、他人に納得してもらえない結論になってしまいます。

参考文献

奥津敬一郎 (1974) 『生成日本語文法論』大修館書店
北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』大修館書店
北原保雄 (1981) 『日本語の世界6 日本語の文法』中央公論社
北原保雄他編 (1981) 『日本文法事典』有精堂
北原保雄編 (1989) 『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』明治書院
久野暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店

佐治圭三 (1981) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房
柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
高橋太郎 (1985) 『日本語のアスペクトとテンス』秀英出版
寺村秀夫 (1982, 1984, 1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』くろしお出版
時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』岩波書店
仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院

益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 (1972 復刊 くろしお出版)
南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
宮地裕 (1971) 『文論』明治書院
山田孝雄 (1936) 『日本文学概論』宝文館
渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房